

# 初等教育課程における住居領域の学習内容の 発展段階と他教科との関連性に関する研究

佐々野 好 継<sup>1)</sup>, 山 下 恭 徳<sup>2)</sup>

Research on literacy for learning about Housing and its relationship  
to other Subjects in the elementary education curriculum

SASANO Yoshitsugu<sup>1)</sup>, YAMASHITA Yasunori<sup>2)</sup>

## 1. はじめに

小学校の家庭科の住居領域における「季節の変化に合わせた住まい方」の学習指導における指導に当たっては、『理科の第3学年における「光と音の性質」, 「太陽と地面の様子」, 第4学年における空気と温度に関する学習や, 体育科の第3学年における健康な生活』に関する学習との関連を図るよう配慮する」と明記されている(\*1)。

第5・6年の家庭科の住居領域は, 生活に関連する学習領域ががいとうする。では, 指導要領上で, 住居領域は, 家庭科以外の教科との関連性は, どのように構成されているのか。それらを具体化することは, 指導要領解説の「まえがき」②が示すところの知識の理解の質を高め, 確かな学力を育成することが期待できる(\*2,3)。

そこで, 本研究は, 生活に伴う学習領域の関連性を示すことで住居領域の学習の質の向上を試みたい。初等教育過程において, 5・6年に置かれている家庭科の住居領域に至るまでの学習過程を踏まえて, 関連する教科等を抽出し, 時系列に整理し, 明確に示すことが目的である。

## 2 小学校家庭科における住居領域の学習指導の構造(\*1)

### 2.1 家庭科の目標及び内容

#### (1) 家庭科の目標

生活の営みに係る見方・考え方を働かせ, 衣食住などに関する実践的・体験的な活動を通して, 生活をよりよくしようとする工夫する資質・能力を次の通り育成することをめざす。

#### (2) 家庭科の内容

- A 家族・家庭生活
- B 衣食住の生活
- C 消費生活・環境

---

1) 長崎大学人文社会科学域

2) 長崎大学生命医科学域

### (3) 住生活

「住生活」の内容は、(6)「快適な住まい方」の1項目で構成されている。

#### (6) 快適な住まい方

ア 次のような知識及び技能を身に付けること。

(ア) 住まいの働きが分かり、季節の変化に合わせた生活の大切さや住まい方について理解すること。

(イ) 住まいの整理・整頓や清掃の仕方を理解し、適切にできること。

イ 季節の変化に合わせた住まい方、整理・整頓や清掃の仕方を考え、適切な住まい方を工夫すること。

## 2.2 「季節の変化に合わせた住まい方」に関する学習指導

### (1) 指導目標

身の回りを快適に整えるために、季節の変化に合わせて室内の温度や湿度、空気の流れを調節したり、適度な明るさを取り入れたりすることが大切であることを理解できるようにする。

### (2) 指導内容

暑さ寒さへの対処の仕方については、室内の温度や湿度、空気の流れを調節することにより、室内の環境を快適に保つことが出来ることを理解できるようにする。

空気の流れについては、夏季に涼しく過ごすための通風または冬季に室内の汚れた空気を入れ換えるための換気の必要性が分かり、効果的な通風または換気の仕方をできるようにする。

採光については、勉強や読書をする場合を取り上げるなど、児童の身近な生活と目の健康とを関連させ、適度な明るさを確保する必要とその方法を理解できるようにする。

音については、学校周辺や家庭での様々な音を取り上げ、音には快適な音や騒音となる不快な生活音があることを理解できるようにする。

### (3) 指導過程

「季節の変化に合わせた住まい方」に関する学習は、理科の第3学年における「光と音の性質」、「太陽と地面の様子」、第4学年における空気と温度に関する学習や、体育科の第3学年における健康な生活の関する学習との関連を図るように配慮する。

## 3 理科の各学年における目標および内容(\*4)

### 3.1 第3学年の目標及び内容

#### 1 第3学年の目標

##### (2) 生命・地球

① 身の回りの生物、太陽と地面の様子についての理解を図り、観察、実験などに関する基本的な技能を身に付けるようにする。

## 2 第3学年の内容

### B 生命・地球

#### 「(2) 太陽と地面の様子」

太陽と地面の様子との関係について日なたと日蔭の様子に着目して、それらを比較しながら調べる活動を通して、次の事項を身に付けることが出来るよう指導する、と明記されている。

具体的には、(ア) 建物によってできる日蔭や、物によってできる陰の位置に着目し、継続的に観察し、それらを比較しながら、時間ごとの、太陽と日蔭や影の位置を調べる。

なお、ここでの指導に当たっては、太陽や影の位置の変化を調べる活動では、方位磁針を用いて方位を調べ、東、西、北、南で空間を捉えるようにする。また、日常生活や他教科との関連として、方位については、日常生活と社会科との関連を図り、日常生活において使えるようにする。

## 3.2 第4学年の目標及び内容

### 1 第4学年の目標

#### (2) 生命・地球

人の体のつくりと運動、動物の活動や植物の成長と環境との関り、雨水の行方と地面の様子、気象現象、月や星について追及する中で、生物を愛護する態度や主体的に問題を解決しようとする態度を養う。

### 2 第4学年の内容

#### (4) 天気の様子

日常生活との関連としては、窓ガラスの内側の曇りなど、身の回りで見られる結露現象を取り上げることが考えられる。

## 4 社会の各学年における目標及び内容(\*5)

### 4.1 第3学年の目標及び内容

#### 1 第3学年の目標

社会的な事象の見方・考え方を働かせ、学習の問題を追及・解決する活動を通して、次のとおり資質・能力を育成することをめざす。

#### 2 第3学年の内容

(1) 身近な地域や市区町村の様子について、学習の問題を追及・解決する活動を通して、次の事項を身に付けることができるよう指導する。

イ (ア) 都道府県内における市の位置、市の地形や土地利用、交通の広がり、市役所など主な公共施設の場所と働き、古くから残る建造物の分布などに着目して、身近な地域や市の様子を捉え、場所による違いを考え、表現すること。

なお、実際の指導に当たっては、生活科での学習経験を活かし、小高い山や校舎の屋上

など高いところから身近な景観を展望したりする活動が考えられる。

(内容の取扱い)

ここでは、市の様子に関する内容の指導において、自分たちの位置の位置を確かめたり調べたことを白地図にまとめたりする際に必要となる方位や主な地図記号について、地図帳を参照して理解し活用できることを求めている。

方位については、四方位と八方位を扱う。その際、児童の実態等を考慮に入れ、最初に四方位を取り上げ、八方位については、ここでの学習を含めて第4学年終了までに身に付けるようにする。

主な地図記号については、身近な地域の様子を地図に表したり、地図から市の様子を読み取ったりする際には、地域の実態を踏まえて必要なものを扱うようにする。

## 4.2 第4学年の目標及び内容

### 1 第4学年の目標

社会的な事象の見方・考え方を働かせ、学習の問題を追究・解決する活動を通して、次のとおり資質・能力を育成することをめざす。

### 2 第4学年の内容

(3) 自然災害から人々を守る活動について、学習の問題を追究・解決する活動を通して、次の事項を身に付けるようにする。

ア(ア) 地域の関係機関や人々は、自然災害に対し、様々な協力をして対処してきたことや、今後、想定される災害に対し、様々な備えをしていることを理解すること。

## 5 生活科における目標と内容(\*6)

### 5.1 生活科の目標

具体的な活動や体験を通して、身近な生活に関わる見方・考え方を活かし、自立し生活を豊かにしていくための資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

### 5.2 生活科の内容—内容の構成要素と階層性—

生活科の各内容は3つの階層で構成されている。まず、第1の階層は、内容(1)「学校と生活」、内容(2)「家庭と生活」、内容(3)「地域と生活」があり、これらは児童の生活圏としての環境に関する内容である。児童にとって最も身近な学校、家庭、地域を扱う内容が第1の階層といえる。

次に、第2の階層として、内容(4)「公共物や公共施設の利用」、内容(5)「季節の変化と生活」などがあげられる。これらは、自らの生活を豊かにしていくために低学年の時期に体験させておきたい活動に関する内容である。活動を通して次第に児童一人一人の認識を広げ、資質・能力を育成するために必要な活動である。

そして、第3の階層に、自分自身生活や成長に関する内容(9)「自分の成長」を位置付け、内容(1)～(8)のすべての内容との関連が生まれる階層として捉えていく。

### 5.3 指導計画の作成と内容の取扱い

#### (1) 指導計画作成上の配慮事項

「(2) 児童の発達段階を踏まえ、2学年を見通して学習活動を設定すること」の中に、「内容を実現する学習活動が、教える側の一方的な都合で計画されるのではなく、児童の発達段階や特性に適合しているかを吟味したうえで、単元を構成し、2学年を見通して効果的に配置することを今まで以上に心がける必要がある。そのさい、第1学年前期の時期、社会科や理科、総合などをはじめとする各教科等への接続を意識する第2学年後半の時期といった、第2学年での児童の成長やその際に見せる空間認識や時間意識などの認知の特性や違いを意識し、それらを教師が自覚して学習活動を反映させることが考えられる」としている。

例えば、内容(1) 学校と生活の学習においては、入学直後の「学校探検」を通して、自分を中心にした身の回りの人・もの・ことへの関わりを深める等の活動が考えられる。また、空間認識の特性を生かした取り組みとしては、例えば、内容(2) 公共物や公共施設の利用の学習においても、だ1学年では、身近で愛着度の高い「公園」に着目し、第2学年では、児童の生活圏の広がりや空間認識の広がりから、内容(3) 地域と生活の学習として、学校の周辺の探検を通して、身近な商店街や公共施設に着目し、気付きの質を高める取り組みが考えられる。こうした取り組みの積み重ねが、第3学年以上の学習を支える。

### 5.4 指導計画の作成と学習指導

#### (1) 単元計画の作成

「4 低学年特有の発達・成長への配慮 (p.91)」の中に、この時期の発達・成長の特性を踏まえ、次のことに配慮する必要がある。

「一つ目は、低学年の児童は生活圏としての身近な学校や地域を、どのように捉えているか、という空間的な認識に関わることである。

児童は日々の学校生活を通して、教室から学校全体へ、自分の通学路や学校の周囲へと認識できる空間が広がっていく。しかし、それらに対する認識は、点と点との繋がりであり、平面的な広がりをもつものにはなりにくい。」としている。(\*7.8)

## 6 考察

### 6.1 初等教育における住居領域と教科間の関連性および内容の発展

小学校家庭科の「住生活」の内容は、「(6) 快適な住まい方」の1項目で構成されており、指導事項には「ア(ア) 住まいの主な働きが分かり、季節の変化に合わせた生活の大切さや住まい方について理解すること。ア(イ) 住まいの整理整頓や清掃の仕方を理解し、適切にできること」などがあげられる。

この「ア(ア)の 季節の変化に合わせた生活の大切さ」は、小学校低学年の生活科の内容を構成している要素の一つである(5)「季節の変化と生活」に対応している。また、理科中学年の「太陽と地面の様子」、「天気の様子」は、結露など身近な生活事象を例に取り上げることが指摘されており、住生活のア(ア)の学習指導の内容と関連が指摘できる。

このことは、生活科、理科という科目の関係と低学年から中学年の学年を通じているこ

とから、生活科〈5〉「季節の変化と生活」は、住生活においては、家庭科住居の「季節の変化に合わせた住まい方」と連動している。また、児童の空間認識の発達段階に対応した、内容の見方・考え方の視点が指摘できる。

また、生活科の内容(2)「家庭生活」の中に、整理整頓が、生活習慣の視点から扱われている。

この整理整頓は、高学年の家庭科の住生活では「空間を有効に使う」視点からの学習内容へと発展・連動が見られる。

逆に言えば、家庭科の住生活は、低学年の生活科と関連があることが指摘できることから、家庭科の住居領域の学習指導においては、基礎知識として生活科および社会、理科の学習内容を復習することが重要だと考えられる。また、空間認識の発達を前提に学習内容が展開・発展していることが指摘できる。

## 6.2 生活科、社会科、及び家庭科(住生活)における学習対象としての空間認識の広がり

初等教育における生活に関連する学習対象は、生活空間を、より具体的に認識すること、及びその空間的広がりを指摘できる。

小学校家庭科の住居領域の学習内容である住生活を見ると、室内→学校内→学校周辺としての空間の広がりを学習対象としており、室内は、暑さ・寒さの問題を快適さという問題意識の視点から扱っている。

また、生活科の内容(1)「学校と生活」においては、学校周辺を教材として扱うように示唆している。第1学年の学校探検や、第2学年の学校周辺の探索などが学習活動としてあげられている。児童の生活に関連が強い内容となっている。

一方、中学年の社会は、地理的環境を扱い学校の位置と空間の広がりが学習対象になっており、児童の生活・徒歩圏に加え、日常生活圏とその周辺の地理的環境も含まれる。

次いで、理科は、東西南北としての空間の方位性を含んでの学習内容の展開となっている。

すなわち、生活科、社会科・理科、及び家庭(住生活)は、学校及び学校周辺を児童・生徒の日常生活圏・徒歩圏の広がりに対応した空間認識の発達段階に合わせた学習内容で構成されており、教材化できることが分かる。

## 7 結論

1. 小学校家庭科の住居領域は、日常生活・徒歩圏を軸に生活空間の広がりを見せながら、身近な空間を題材に展開することが指摘されている。教科間の関連は、第1・2学年の生活科、第3・4学年の社会と理科、及び第3学年の体育と関連しており、学習内容が発展・展開していることが分かった。

また、社会科・4年の「自然災害」および理科・4年の「天気の様子」も関連があり、この関連を活かすことで、高学年の家庭科の住居領域の学習指導における知識の理解の質が高まることが期待できる。

2. 生活科、社会・理科および家庭(住生活)は、学校周辺の空間を児童生徒の空間認識

の発達段階の視点から教材化できる。また、これは、指導要領解説「まえがき」に示されている指導要領の枠組みの中で、知識の理解の質をさらに高め、確かな学力を育成すると考える。

### 謝辞

本論文をまとめるにあたり、共同研究者である柳紀子さんには、学習内容や資料整理のお手伝いなどして頂きました。ありがとう。

### 参考文献

1. 文部科学省：小学校学習指導要領解説（平成29年告示）家庭編 東洋館出版社
2. 家庭科、技術・家庭における住居の学習指導—生活科構想— 長崎大学教育学部附属教育実践総合センター 2012.3
3. 生活科および総合的な学習の時間と家庭科における住居の領域との対応の構想—生活科からはじめる住居の空間学習— 日本生活科・総合的学習教育学会 平成27年
4. 文部科学省：小学校学習指導要領解説（平成29年告示）理科編 東洋館出版社
5. 文部科学省：小学校学習指導要領解説（平成29年告示）社会編 日本文教出版
6. 文部科学省：小学校学習指導要領解説（平成29年告示）生活編 東洋館出版社
7. 山下恭徳 柳紀子 佐々野好継：小学校教育における生活圏と空間認識の広がりに関する学習の教材開発—校区を4区分した「田の字形」構想 日本生活科・総合的学習教育学会 令和元年度第28回全国大会（大分大会） p.174
8. 山下恭徳 柳紀子 佐々野好継：学校教育を介した「持続する」地域居住・まちづくり—空間認識と学校段階のイメージ— こども環境学研究 2020年

